

# キャリア教育の取り組みと大学生のキャリア意識変化の 関連についての追跡研究 I—自己効力感を中心に—

Relationship between Career Education and Career Consciousness  
of University Students - A Feelings of Self - Efficacy -

李艶・有山篤利

Li Yan, Ariyama Atsutoshi

## 要 約

大学生の就職における問題点として、「就職問題に取り組む意欲が乏しい」「希望する職業がはっきりしない」「自己の適性・適職を自覚していない」などが挙げられている。このことは、進路選択過程に対する自己効力感が不足していると考えられる。キャリア教育の取り組みにより、進路選択過程における自己効力感を高めると推測される。本研究は1年間の追跡調査により、キャリア教育プログラムの取り組みが学生の進路選択行動に対する自己効力感に影響を与えたかを検討することを目的とした。調査は滋賀県内の私立大学1年生から3年生、116人を対象に3つの時期に分けて行われた。調査には浦上(1995)が作成した「進路選択に対する自己効力尺度」を利用した。その結果、わずか1年の間に、変化が見られた。初期には将来計画を立てるための情報収集や職探への対処において戸惑いがあり、なにをどうするか決められない状況から、後期には計画を立て、情報を収集し、自分の能力を活用する意識・自信がはっきり認められた。これは、自己効力感により行動の変容のための操作をすることが可能になり、キャリア教育の取り組みと指導においてこの自己効力感を高めることができたと考えられる。

**Key Words** : キャリア意識, キャリア教育, 自己効力感

## 目 的

経済・社会環境の変化, 企業組織の変化, 人々の価値観・職業観の変化などにより, 人々のキャリアに対する関心が急速に高まり, まさに“キャリアの時代”といってもよいだろう。

キャリアとは何か, 多様な定義や説明がある。ここでは, 「個人」と「働くこと」との関係の上に成り立つ概念とする。キャリアをめぐる環境が地球規模的に変化してきたため, 自律的キャリアの形成が社会的に強く求めるようになってきた。過去の若者は迷うことなく就職するのが常であったが, 今はそれが通用できなくなり, 自分を探し, 職を探索こと(就職)が自律的キャリア形成が不可欠になっている。

Bandura(1977)は, ある行動とそれがもたらす結果に関して, 結果期待と効力期待という2つの判断を区別する必要があると指摘した。結果期待とは, 自分の行動の結果についての予期であり, 一方, 効力期待とは, 自分がその結果を得るための行動をうまく実行できるという予期

である。そして、その効力を自分が持っているという確信、つまり、ある課題に対する自信および確信の程度のこと自己効力 (self-efficacy) と呼ぶ。Bandura は、この自己効力の高低が動機づけを大きく規定すると考える。進路選択における自己効力の研究は、Hackett & Betz (1981) が、女性の進路発達を理解するために、Bandura の理論をキャリア開発研究に持ち込んだことにより始まった (Hackett, Lent & Greenhaus, 1991; 廣瀬, 1998)。

廣瀬 (1998) によると、これが出発となり、自己効力感を進路関連領域の研究に取り入れた研究が次第に拡大し、今日では内容的に大きく3つに分類することができるという。その3つとは、①進路選択に対する自己効力、②進路選択過程に対する自己効力、③進路適応に対する自己効力である。このなかで、職業未決定問題について考えるには、進路選択のプロセスそのものに焦点を当てた「進路選択過程に対する自己効力」について検討する必要がある。これは、自己評価・情報探索・計画立案・問題解決など進路選択に必要な行動をうまく行うことができるかどうかという自己効力感を問題としている。この分野の研究は、Taylor & Betz (1983) から始まった。Osipow, Garnal, & Barak (1976) や Holland & Holland (1977) によって、進路に関する意思決定という課題への取り組みやそのためのスキルについての「自信の無さ」が、不決断の規定要因として重要な変数であると報告されており、Taylor らはその「自信の無さ」という概念を、自己効力という観点から捉えなおした。そして、Taylor らは、CDMSE (Career Decision-Making Self-Efficacy) の尺度を開発し、進路を選択するプロセスで必要な行動に対する自己効力感の測定を可能にした。この CDMSE を使って多くの研究がなされているが、とくに、Taylor & Betz が行ったように、職業未決定・進路不決断の抑制要因に関与する報告が多い。つまり、この自己効力感の高い者は、進路選択行動を能動的に活発に行いし、逆にそれが低い者は、進路選択行動がたとえ自分の人生の目的を達成するために必要なものと理解していたとしても、進路選択を避けか、あるいは不十分な活動に終始してしまうと考えられている (浦上, 1995; 下村, 2001)。

進路選択に対する自己効力感とは、進路選択に必要な行動に対する遂行可能感を意味する。進路選択行動が自分にうまくできるかどうかという予期の認知されたものであり、就職活動に直接関係がある。この有能感がキャリア意識の一構成要素として近年注目されている。自己効力は人がどのぐらい努力するか、困難に直面した際にどれぐらい耐えられるかを決定する。また強い自己効力感を持つ人は自分の能力をうまく活かし、さらに努力するといえる。

大学生の就職にあたって、主な問題点として、「就職問題に取り組む意欲が乏しい」「希望する職業がはっきりしない」「自己の適性・適職を自覚していない」などが挙げられている。このことは、進路選択過程に対する自己効力感が不足している者の特徴とよく合致している。

大久保 (2002) は、短大生や大学生が就職活動を途中でやめるパターンを4つ紹介している。まず、第1は「高校から大学への接続の時点」で、高校卒業時点で、本来なら就職を希望した学生が、高卒者の就職環境の厳しさ、少子化などに伴う大学入学の容易さなどから、大学進学はしてみたが、学習目標の喪失から大学生活から遠ざかってしまうことである。次は「就職活動が始

まる時点」である。自分なりの将来のキャリア・ビジョンや職業観などが構築できず、就職戦線のスタートラインに立つことができない。したがって、大学が主催する就職ガイダンスや就職セミナーなどには参加せず、問題を先送りにしてしまうことである。第3は「就職戦線の途中でリタイア」で、これには大きく2つの下位タイプあるという。まずは、実際の就職活動を通じて第1志望の会社に入社できないため、妥協してまで就職したくないという下位タイプである（これは、自己効力感が高すぎるという結果がもたらしたケースなのかもしれない）。もう1つのタイプは、何社かの面接試験を受けてなかなか合格できないので、自信を失い、就職戦線から離脱する下位タイプである。そして第4は「就職戦線の終盤」において、自分なりに努力はしているが、なかなか内定がもらえないため、内定をもらっている学生との間に距離感を感じ、取り残された感覚から就職活動をやめることである。このように、新卒無業者、大卒フリーター、ニートなどの発生には段階的な違いはあるが、共通しているのは、学生本人の「やめる」「あきらめる」といった自らの意思が大きな要因となっている（香山，2004；谷内，2005）。この場合も、進路選択過程に対する自己効力感が欠如している者の特徴とよく合致している。

2002年に社団法人日本私立大学連盟（学生委員会・同第一分科会）が行った調査報告（『第11回学生生活実態調査集計報告書』）において、大学生は就職活動にあたって様々な心配事があることが紹介されている。それによると、「就職できるかどうか（49.3%）」「適性にあった職業を選べるかどうか（44.0%）」「就職すること自体（24.3%）」となっている。第10回（1998年）の調査に比べると、「就職できるかどうか」という根本的な不安が35.4%から49.3%と急増している。さらに注目しなければならないことは、逆に「特に不安を感じたことはない」と答えた者はわずか6.1%であるという点である。

さらに、大学生が日常抱えているさまざまな不安や悩みの中で、就職や将来の進路に関する不安がトップにきている

浦上（1994）は、現代における職と住の空間的・時間的分離により、職業の世界における学習に対する家庭の役割の低下といった環境が、青年の進路選択過程に対する自己効力感の育成を妨げていると考える。また、浦上は、知育偏重・偏差値重視の学校教育では、進路選択過程に対する自己効力感の育成が難しいことを強調している。しかしながら、そのような環境で育ったことが原因で、その自己効力感が低い状態が続いているとしても、前に述べたように、青年の行動変容のための操作をすることが可能であり、教育指導においてこの自己効力感を高めることができると考えられる。

では、進路選択過程に対する自己効力感を高めるにはどのような手順を踏めばよいのだろうか。前述したように、Banduraは自己効力を生み出す要因として、「遂行行動の達成」「代理的経験（モデリング）」「言語的説得」「情動的喚起」の4つを挙げている。「情動的喚起」に着目した研究として安住・足立（2003）がある。安住らは、キャリア・グループに参加した者はその直後に進路選択過程に対する自己効力が高まったことを報告している。このキャリア・グループは、就職活動に対する不安を少しでも軽減させることを目的として行われたグループワークであり、その

効果が現れたと考えることができる。また、安住・足立（2004）は、そのキャリア・グループ参加後1年が経過後に、その効力が更に高まることを報告している。

筆者らが勤務している大学では、地域循環型のキャリア教育を取り入れている。その内容は、地元と連携した「地域活動インターシップ」、「地元企業連携型課題解決プログラム」をコアプログラムとして、学生の課題解決力、プレゼンテーション能力などの育成を図る。具体的には「キャリア形成入門（1年次）」や「社会人による対談形式の講義」などの実施により、キャリア基礎力と基本態度を養成する。本研究はその1年間の追跡調査により、キャリア教育プログラムの取り組みが学生の進路選択行動における自己効力感に影響を与えたか否かを検討することを目的とする。

## 方 法

**被調査者：**滋賀県内のある私立大学1年生から3年生、3つの時期に分けて調査を行った。それぞれの時期は、2010年4月、7月、12月であった。調査参加者は最初145人で、2回目もしくは3回目の調査日に都合がつかない学生がいたために、追跡調査全過程の参加者は116名であった。

**調査項目：**浦上（1995）は Taylor & Betz（1983）の進路決定における自己効力尺度を基に、修正を行い、30項目からなる尺度「進路選択に対する自己効力尺度」を利用した。

各質問項目の内容は以下の通りである。

1. 自分の能力を正確に評価すること。
2. 自分が従事したい職業（職種）の仕事内容を知ること。
3. 一度進路を決定したならば、「正しかったのだろうか」と悩まないこと。
4. 5年先の目標を設定し、それにしただって計画を立てること。
5. もし望んでいた職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること。
6. 人間相手の仕事か、情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること。
7. 自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと。
8. 何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合、それに対処すること。
9. 将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること。
10. 本当に好きな職業に進むために、両親と話し合いをすること。
11. 自分の理想の仕事を思い浮かべること。
12. ある職業についている人々の年間所得について知ること。
13. 就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること。
14. 将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること。
15. 欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること。
16. 自分の才能を、最も生かせると思う職業的分野を決めること。
17. 自分の興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと。
18. 現在考えているいくつかの職業のなかから、一つの職業に絞り込むこと。

19. 自分の将来の目標と、アルバイトなどでの経験を関連させて考えること。
20. 両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること。
21. いくつかの職業に、興味を持っていること。
22. 今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと。
23. 自分の将来設計にあった職業を探すこと。
24. 就職時の面接でうまく対応すること。
25. 学校の就職係や職業安定所を探し、利用すること。
26. 将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること。
27. 自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること。
28. 自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと。
29. 卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要なのかどうか決定すること。
30. 望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと。

## 結 果

### 1. 自己効力感の因子構造の変化

表1から表3は、3つの時期それぞれにおける自己効力感の因子構造を示している。

表1 効力感の因子構造 (No 1)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
L14	-0.72236	0.21894	0.27091	0.01016	0.06573	0.64755
L4	-0.69109	0.22905	0.01267	-0.04116	-0.12439	0.54740
L12	-0.59402	0.15650	0.16165	-0.11999	-0.24676	0.47878
L13	-0.57568	0.22853	0.11653	-0.37964	-0.27854	0.61893
L9	-0.53368	0.31690	0.16091	-0.12795	-0.05844	0.43092
L11	-0.47980	0.42782	0.17362	-0.01763	-0.26670	0.51482
L10	-0.45965	0.02695	0.18194	-0.18702	-0.01417	0.28028
L15	0.44371	0.21691	0.43360	-0.24802	0.10444	0.50435
L22	-0.37936	0.36374	0.21191	-0.16139	-0.24885	0.40910
L28	0.12204	0.61344	0.46463	-0.18910	-0.25935	0.71010
L16	-0.33548	0.61052	0.28841	-0.07078	-0.17445	0.60390
L6	-0.09667	0.56292	0.04469	-0.25066	-0.03382	0.39220
L1	-0.27883	0.56020	-0.08264	-0.11163	-0.17779	0.44247
L2	-0.26664	0.47469	0.27438	0.01482	-0.00078	0.37192
L17	-0.32920	0.45534	0.36309	-0.12874	-0.12475	0.47968
L7	-0.33340	0.43811	0.21430	-0.25010	-0.22780	0.46348
L21	-0.12081	0.40100	0.19210	-0.01355	-0.12430	0.22793
L19	-0.31972	0.08915	0.55993	-0.04902	-0.18619	0.46076
L23	-0.33840	0.31415	0.55027	-0.15965	-0.29276	0.62720
L27	-0.17731	0.35217	0.53174	-0.06304	-0.10100	0.45238
L25	-0.29829	0.07742	0.52981	-0.25973	-0.25851	0.50995
L26	-0.33714	0.36413	0.48162	-0.17384	-0.40293	0.67079
L30	-0.07452	0.02787	0.46203	-0.42752	-0.20211	0.44342
L20	0.06701	0.33435	0.40115	-0.31044	-0.16711	0.40150
L29	-0.10608	0.27507	0.32595	-0.20400	-0.00633	0.23482
L8	-0.18672	0.10343	0.18502	-0.71773	-0.10870	0.60675
L5	-0.12625	0.16478	0.10654	-0.64065	-0.05773	0.46821
L18	-0.11391	0.20793	0.31629	0.00723	-0.62437	0.54615
L3	-0.12504	0.10398	0.04033	-0.42319	-0.48939	0.44666
L24	-0.09326	0.23219	0.19461	-0.30463	-0.47600	0.41986
負荷量の二乗和	3.83074	3.50908	3.11066	2.14294	1.81884	
寄与率	12.76912	11.69692	10.36886	7.14313	6.06281	
累積寄与率	12.76912	24.46604	34.83489	41.97802	48.04084	

表2 効力感の因子構造 (No 2)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
L25	0.79483	0.12063	-0.16564	0.00230	0.06295	0.67771
L26	0.76246	0.04977	-0.31393	0.06865	0.07946	0.69340
L29	0.73853	0.19535	-0.16638	0.02635	0.04628	0.61411
L28	0.72731	0.24225	-0.23639	0.25661	0.03972	0.71098
L30	0.71523	0.21744	-0.20663	0.19907	0.14148	0.66118
L23	0.70639	0.34758	-0.13338	0.15317	0.17161	0.69050
L27	0.67261	0.29226	-0.00108	-0.01313	-0.09664	0.54734
L24	0.61137	0.18806	-0.13159	0.23256	-0.05656	0.48374
L18	0.61064	0.17215	-0.34118	0.17306	0.20971	0.59285
L19	0.60893	0.18190	-0.03241	0.34851	0.14306	0.54686
L20	0.58696	0.11861	-0.28878	0.19395	0.13251	0.49716
L22	0.55905	0.37052	0.00809	0.14104	0.00797	0.46984
L21	0.53066	0.23957	-0.21693	0.12754	0.11678	0.41596
L14	0.32826	0.69838	-0.16718	0.20084	0.16180	0.68996
L17	0.36194	0.64069	-0.25002	0.26294	0.02359	0.67368
L16	0.29318	0.63620	-0.36992	0.24348	0.04176	0.68856
L12	0.31138	0.63040	-0.27087	0.06548	0.21925	0.62009
L9	0.24746	0.51931	-0.24323	0.33630	0.30250	0.59468
L13	0.20634	0.50789	-0.25880	0.50237	0.07696	0.62579
L7	0.44099	0.49108	-0.36437	0.33621	0.19245	0.71847
L11	0.36343	0.41079	-0.39891	0.13941	0.34879	0.60105
L4	0.23722	0.25445	-0.71905	0.02450	0.03205	0.63968
L1	0.13428	0.25956	-0.59882	0.27740	0.14278	0.54133
L3	0.21192	0.12060	-0.58199	0.38243	0.17474	0.57495
L15	0.26679	0.46396	-0.48299	0.27232	0.01527	0.59412
L2	0.23963	0.39107	-0.47006	0.27000	0.19555	0.54245
L6	0.25747	0.23119	-0.46711	0.44904	0.06754	0.54412
L8	0.11966	0.25453	-0.12199	0.69423	0.10096	0.58613
L5	0.17914	0.16164	-0.36523	0.67443	0.13323	0.66422
L10	0.09351	0.24232	-0.19959	0.20464	0.87175	0.90913
負荷量の二乗和	7.02785	4.03007	3.32890	2.63596	1.38726	
寄与率	23.42615	13.43357	11.09633	8.78654	4.62421	
累積寄与率	23.42615	36.85972	47.95605	56.74259	61.36680	

表3 効力感の因子構造 (No 3)

項目	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	共通性
L28	0.75291	0.24874	-0.23445	0.15350	0.12957	0.72406
L23	0.74138	0.41079	-0.11732	0.02375	-0.06067	0.73641
L18	0.71359	0.20766	-0.26892	-0.12519	-0.11734	0.65410
L22	0.71042	0.37564	-0.02458	-0.11142	-0.13479	0.67700
L26	0.68607	0.29486	-0.04662	0.24062	0.12554	0.63347
L25	0.68295	0.20157	-0.32226	0.08499	0.08743	0.62576
L27	0.62580	0.29688	-0.15175	0.03440	0.18719	0.53901
L20	0.61986	-0.05825	-0.14543	0.26323	0.05495	0.48108
L30	0.59937	0.25898	-0.14778	0.18954	0.46344	0.69886
L29	0.57893	0.20088	-0.05432	0.15025	0.54542	0.69852
L19	0.57053	0.14708	-0.22620	0.08216	0.16780	0.43321
L21	0.45265	0.18729	-0.00766	0.39844	-0.05660	0.40199
L24	0.42620	0.08239	-0.32065	0.27681	0.03314	0.36898
L14	0.15259	0.78408	-0.14455	-0.03225	0.24253	0.71882
L16	0.26219	0.71545	-0.29133	0.04445	-0.03193	0.66848
L9	0.24626	0.71297	-0.20760	-0.04972	0.16735	0.64255
L15	0.22762	0.69974	-0.33410	-0.07870	0.21212	0.70426
L17	0.21603	0.67969	-0.13114	0.10910	-0.00999	0.53785
L11	0.25200	0.62138	-0.08537	0.39258	-0.08527	0.61830
L4	0.06537	0.59379	-0.28153	0.10348	-0.06136	0.45059
L12	0.25859	0.56698	-0.11889	0.18780	-0.00121	0.43775
L2	0.16294	0.52189	-0.28786	0.23684	0.10461	0.44882
L13	0.34139	0.51554	-0.45173	0.12084	-0.05853	0.60442
L7	0.24763	0.44644	-0.41286	0.16427	-0.04202	0.45983
L10	0.22643	0.44473	-0.30552	0.23061	0.11384	0.40853
L3	0.22988	0.24715	-0.64468	-0.00431	0.11670	0.54318
L8	0.10853	0.34225	-0.63682	0.07548	0.05050	0.54270
L6	0.17891	0.28384	-0.53354	0.27321	-0.19033	0.50810
L5	0.18830	0.26474	-0.47746	0.17140	0.09744	0.37238
L1	0.07735	0.10967	-0.25985	0.51582	0.12014	0.36604
負荷量の二乗和	6.02939	5.72779	2.80108	1.23878	0.90799	
寄与率	20.09798	19.09263	9.33692	4.12927	3.02662	
累積寄与率	20.09798	39.19061	48.52754	52.65680	55.68342	

表4 初期・中期・後期の比較

項目	平均				標準偏差		
	No 1	No 2	No 3		No 1	No 2	No 3
1	2.26	2.32	2.33	↑	0.79	0.83	0.8
2	2.55	2.47	2.45	↓	0.82	0.85	0.78
3	2.28	2.25	2.31		1.06	0.94	1
4	1.89	1.92	1.99		0.89	0.89	0.88
5	2.33	2.37	2.47	↑	0.94	0.91	0.87
6	2.63	2.59	2.63		0.93	0.97	0.9
7	2.62	2.55	2.58		0.87	0.91	0.88
8	2.28	2.29	2.37	↑	0.92	0.9	0.97
9	2.52	2.43	2.43	↓	0.87	0.92	0.9
10	2.76	2.54	2.69	↓	0.99	1.04	0.99
11	2.88	2.63	2.55	↓	0.94	1.04	0.91
12	2.27	2.4	2.27		0.92	0.96	0.98
13	2.25	2.28	2.34	↑	0.79	0.85	0.82
14	2.36	2.27	2.29		0.91	0.92	0.88
15	2.43	2.44	2.41		0.94	0.97	0.9
16	2.5	2.43	2.46		0.89	0.97	0.89
17	2.52	2.38	2.42		0.94	0.89	0.92
18	2.35	2.33	2.36		0.89	0.93	0.87
19	2.37	2.36	2.37		0.98	0.95	0.97
20	2.9	2.69	2.65	↓	0.86	0.98	1
21	2.62	2.43	2.46	↓	0.96	1	0.98
22	2.12	2.06	2.07		0.85	0.81	0.95
23	2.34	2.27	2.29		0.92	0.88	0.85
24	2.17	2.29	2.16		1	0.99	0.97
25	2.3	2.37	2.33		0.85	0.92	0.93
26	2.47	2.4	2.38	↓	0.97	1.03	0.97
27	2.49	2.39	2.47		0.94	0.96	0.99
28	2.68	2.63	2.57	↓	0.89	0.99	0.91
29	2.51	2.52	2.48		0.96	1.03	1
30	2.5	2.44	2.4		0.96	0.98	0.98

表1は、キャリア教育取り組みの初期において、大学生の進路選択における自己効力感の因子構造を示している。初期における因子として、因子1は「将来計画と対処」、因子2は「職業選択と探索」、因子3は「情報収集と意志の確定」、因子4は「困難への対処」、因子5は「面接への対処」である。

表2は、キャリア教育取り組みの中期において、大学生の進路選択における自己効力感の因子構造を示している。因子1は「情報収集・計画」、因子2は「能力・才能の活用」、因子3は「評価・計画」、因子4は「困難への対処」、因子5は「交流」である。

表3は、キャリア教育の後期において、大学生の進路選択における自己効力感の因子構造を示している。因子1は「情報収集・計画」、因子2は「能力・才能の活用」、因子3は「困難への対処」、因子4は「能力の評価」であった。キャリア教育への取り組みにより、わずか1年間に、情報収集を重視し、将来計画を立て、自分の能力を活用する意識が高まり、キャリア意識における自己効力感が増大したことが認められた。

表4は、初期・中期・後期それぞれにおける自己効力感の強度を示している。

分散分析の検定結果によると、初期と後期において変化が認められた(有意差がある)のは、「自分の能力を正確に評価すること」「もし望んでいない職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること」「何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合、それに対処すること」「就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること」における自信が強くなったことである。さらに、「多種類の希望職業から絞り込んで職を選ぶこと」「硬い考えを捨てて柔軟に考えること」が増えた。ところが、「自分が従事したい職業の内容を知ること」「将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること」「自分の理想の仕事の思い浮かべること」「いくつかの職業に、興味を持っていること」の考えが弱くなり、「積極的に就職先の人と交流する自信」が減り、さらに「もっと勉強する意欲」が弱くなったことが認められた。

## 考 察

初期・中期・後期の進路選択に自己効力の因子構造の変化が見られた。

初期には、将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること、本当に好きな職業に進むために両親と話し合いをすること、自分の理想の仕事の思い浮かぶこと、ある職業について人々の年間所得について知ること、就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること、将来のために在学中にやっておくべきことの計画を立てること、欲求不満を感じても、自分の勉強または仕事の成就まで粘り強く続けること、といった「**将来計画と対処**」の傾向が明らかに現れていることが言える。ところが、自分の能力を正確に評価すること、自分が従事したい職業の仕事内容を知ること、人間相手の仕事か情報相手の仕事かどちらかが自分に適しているか決めること、自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと、自分の才能を最も活かせると思う職業的分野を決めること、自分の興味を持っている分野で働い

ている人と話す機会を持つこと、いくつかの職業に、興味を持っていること、今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと、といった「**職選択と探索**」傾向、また、自分の将来の目標とアルバイトなどでの経験を関連させて考えること、両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること、自分の将来設計にあった職業を探すこと、学校の就職係や職業安定所を利用すること、将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること、自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること、卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要かどうか決定すること、望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと、といった「**情報収集と意志の確定**」、「**困難への対処**」、「**交流**」などの傾向が、上述の「**将来計画と対処**」などの4つとは違った次元にあることがわかった。

中期の特徴は、学校の就職係や職業安定所を利用すること、将来どのような生活をしたいか、はっきりさせること、自分の職業選択に必要な情報を得るために、新聞・テレビなどのマスメディアを利用すること、自分の興味・能力に合うと思われる職業を選ぶこと、卒業後さらに、大学、大学院や専門学校に行くことが必要かどうか決定すること、望んでいた職業が、自分の考えていたものと異なっていた場合、もう一度検討し直すこと、現在考えているいくつかの職業のなかから、1つの職業に絞り込むこと、自分の将来の目標とアルバイトなどでの経験を関連させて考えること、両親や友達が勧める職業であっても、自分の適性や能力にあっていないと感じるものであれば断ること、いくつかの職業に、興味を持っていること、今年の雇用傾向について、ある程度の見通しを持つこと、自分の将来設計にあった職業を探すこと、就職時の面接でうまく対応すること、といった「**情報収集・計画**」の傾向が見られた。自分の望むライフスタイルにあった職業を探すこと、将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること、自分の理想の仕事を思い浮かべること、ある職業についている人々の年間所得について知ること、就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること、将来のために、在学中にやっておくべきことの計画を立てること、自分の才能を、最も生かせると思う職業的分野を決めること、自分が興味を持っている分野で働いている人と話す機会を持つこと、といった「**能力・才能の活用**」傾向も明らかになった。自分の能力を正確に評価すること、自分が従事したい職業(職種)の仕事内容を知ること、一度進路を決定したならば「**正しかったのだろうか**」と悩まないこと、5年先の目標を設定し、それにしたがって計画を立てること、人間相手の仕事か情報相手の仕事か、どちらが自分に適しているか決めること、といった「**評価・計画**」傾向が上述の2つの傾向と反対の次元にあることが明らかになった。「**困難への対処**」や「**交流**」の傾向も認められた。

後期においては、職業選択における自己効力感は、「**情報収集・計画**」、「**能力・才能の活用**」、「**困難への対処**」、「**能力の評価**」などへの自信が認められた。

わずか1年の間に、かなりの変化が見られた。初期には将来への計画と情報収集、職業への探索、困難への対処において戸惑いがあり、どうしたらよいか決められない状況から、計画を立て、

情報を収集し、自分の能力を活用する意識・自信がはっきり見えてきた。これは、キャリア教育により、行動変容のために自己を操作することが可能になり、自己効力感を高めることができたためと考えられる。

基礎的分析の結果から、1年後における目立った変化は、「自分の能力を正確に評価すること」「もし望んでいない職業に就けなかった場合、それにうまく対処すること」「何かの理由で卒業を延期しなければならなくなった場合、それに対処すること」「就職したい産業分野が、先行き不安定であるとわかった場合、それに対処すること」における自信が強められたことである。一方、多種類の希望職種から絞り込んで職業を選ぶことや、硬い考えを捨てて柔軟に考えることの傾向も高まった。ところが、「自分が従事したい職業の内容を知ること」「将来の仕事において役に立つと思われる免許・資格取得の計画を立てること」「自分の理想の仕事を思い浮かべること」「いくつかの職業に興味を持っていること」という傾向は弱まり、また積極的に就職先の人と交流することの自信が弱まり、もっと勉強する意欲も低下した。この現象は、学生が自分のことを正しく知ることができるようになったことにより、より現実的に進路選択に取り組んでいこうとする気持ち・意志の現れと考えることができる。

## 文 献

- 安住伸子・足立由美 2004 「女子大生の進路選択決定援助に関する研究」『学生相談研究』25, pp. 44-54.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy. *Psychological Review*, 84, pp. 191-215.
- Hackett, G. & Betz, N. E. 1981 A self-efficacy approach to the care *Journal of vocational behavior*, 18, pp. 326-339.
- Hackett, G., Lent, R. W. & Greenhaus, J. H. 1991 Advances in vocational theory and research. *Journal of Vocational behavior*, 18, pp. 326-339.
- 廣瀬英子 1998 「進路に関する自己効力研究の発展と課題」『教育心理学研究』46, pp.343-355.
- Holland, J. L. & Holland, J. E. 1977 Vocational Indecision. *Journal of Counseling Psychology*, 24, pp. 404-414.
- 香山リカ 2004 『就職がこわい』講談社
- 大久保幸夫 2002 『新卒無業』東洋経済
- Osipow, S. H., Carney, C. G. & Barak, A. 1976 A Scale of Educational-Vocational *Undecidedness*. *Journal of Vocational Behavior*, 9, pp. 233-243.
- 下村英雄 2001 「進路選択」, 堀洋道監修・吉田富二雄編『心理測定尺度集Ⅱ』サイエンス社
- Taylor, K. M. & Betz, N. E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, 22, pp. 63-81.
- 浦上昌則 1995 「学生の進路選択に対する自己効力に関する研究」『名古屋大学教育学部紀要』(教育心理学) 42, pp. 115-126.
- 谷内篤博 2005 『大学生の職業意識とキャリア教育』勁草書房